

【ねがいましては】

令和3年1月25日

KYOWA SCHOOL

第362号

「外から眺める」

ある日の新聞記事に、マリ共和国生まれの方が京都で大学の学長をされているという記事が載っていました。

その名もウスビ・サコさん。マリ共和国・・・アフリカ北西部に位置する国です。国民一人あたりの年間所得が、約8万円（2017）という最貧国のひとつになります。

サコさん、小学校時代からかなりコントラストの強い生活をされていたようで、小学校3年生までは、結構裕福な家庭で育ったのですが、4～6年生は、水道、電気もない親類のところで生活されたそうです。毎朝一番にすることは、水くみだったそうです。高校へはマリの首都、バマコの名門校へ進学、19歳で中国へ留学します。「木の上で生活していたの？」などといじめられたそうですが、それまでの経験が生きたのか、へこたれなかったそうです。

やがて日本へ留学、その理由のひとつが、日本はテクノロジーが発達していて、レストランではロボットがサービスをしていると信じていたそうですが、いやいや日本のお父さんは家の中ではパッチ姿でごろごろしている。その柔軟性に感銘を受けたそうです。また日本人のがんばりに学ぶ点が多いとも思ったそうです。

そして決断、日本人女性との結婚を機に、「この国で尊敬される人間になろう・・・。」

アフリカから来た留学生たちに必ず言うことがあるそうです。「君たちは母国ではエリートだったかもしれないが、日本では途上国から来たとしか見られない・・・。」

サコさんは力説します。「アフリカ出身という事実は変えられないけれど、アフリカ出身であろうが黒人であろうが同じ人間なんだ。じゃあ頑張って尊敬される存在になろうじゃないか。」

またサコさんは、私たち日本人では気がつかない視点で物事を捉えていました。『世界の苦しむ人を救いたい』という発言を日本で聞くと、ちょっと違和感があります。彼らにとって救うべき世界とは途上国や弱者であって、そこには自分は含まれていないと感ずるからです。『弱い人、かわいそうだね』という無意識の優越感こそ意識改革が必要です。」

このことばに私はガンと石を投げられたような気がしました。確かにその通り、私たち日本人はいつの間にか、常に上から目線な見方を身につけてしまっているのではないか・・・。弱い人やかわいそうな人、という観念そのものが優越感を味わっているからこそ生まれる表現なのではないか・・・。心に冷や汗をかきました。そうなんだ、自分は安定している。自分はそこそこ食えている。自分はなんとか健康な日常を送っているからこそ生まれる「かわいそう」・・・だったのかもしれない。知らずのうちに抱えていた「上から目線」・・・。

いつの間にか差別をしている。

サコさんの目線で見えた日本人の姿が、最後に紹介されています。

「日本人の多くは、他人に何かを頼んだら迷惑では？ 反論したら悪いのでは？と勝手に思い、ふれあいや議論を避けている。日本人の『空気を読む』は、空気を読んだふりをしているだけの場合が多い。本当に空気を読むなら、もっと相手に踏み込み、意見に違いがあるときは議論し、協調や折り合いの道を探ることが大切です。」

日本人を客観的に、また冷静に見つめている方の強烈なメッセージが観えました。

子どもたちの日常の中にある「かわいそう」「空気を読む」は、はたしてどのようなものなのでしょうか。

「かわいそう」は、何かはなれたところで自分には被害が加わりませんようにと願っているようです。

「空気を読む」は、相手の調子に合わせておかないと嫌われてしまっては困るなあと自分を曲げているようです。

ウスビ・サコさんは、日本の方々に「このままでいいのかい」と、ヒントを投げかけてくれています。私たちの日常に鋭く疑問点を見出しています。アフリカ出身であろうが黒人であろうが同じ人間だと、堂々と言ってのけています。

さあ、子どもたち、今の学校生活でいいのですか。今の友人関係でいいのですか。今の学びのスタイルでいいのですか。自分で感じたことははっきりと意見し、そして意見を戴くことへの勇気をほんの少しでいいですから持ってみてはいかがでしょう。

皆がやっているから、昔からそうだから、伝統だから、だから仕方がない・・・。と、流されてはいませんか。

世の中、おかしいことがたくさんあります。信号無視して先に渡った人のほうが早く着きます。背の高い人のほうが高飛びや幅跳びで良い記録が出ます。小さいときからスイミングをしている人は、いきなり学校で始まるプールでじょうずに泳ぐことができます。生まれつき体やところに小さなキズを負っている人は、いつも学校ではビリの方です。

これみんな、比べているからです。くらべない・・・自分は自分です。

以前【ねがいましては】で紹介した女の子のお話を思い出しました。生まれつき歩くことのできないその子は、毎朝、20分かけて200m先のバス停をめぐります。道ばたの小さなお花にあいさつをしながら、通り沿いにあるお店の人にニコッと笑ってごあいさつしながら、嬉しそうに車いすを進めます。「くらべる」は、その子にはありません。

さあ、あなたの思ったこと感じたことを、しっかり目の前の人にお話ししてみましょう。